

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：心理・人間関係学科

資格：講師

氏名：増田 和高

|                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| 研究分野               | 研究内容のキーワード              |
| 障害者福祉, 高齢者福祉, 地域福祉 | ケアマネジメント, アドボカシー, 地域づくり |
| 学位                 | 最終学歴                    |
| 博士(学術) 大阪市立大学      | 大阪市立大学大学院生活科学研究科        |

| 教育上の能力に関する事項 |     |    |
|--------------|-----|----|
| 事項           | 年月日 | 概要 |

| 1 教育方法の実践例   |                   |  |
|--|-------------------|--|
| 1. 社会福祉士・精神保健福祉士国家試験受験対策web講座講師「障害者に対する支援と障害者自立支援制度」(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催) | 2017年08月14日収録     | 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の国家試験受験対策web講座講師として「障害者に対する支援と障害者自立支援制度」科目を担当。オープンソースとして講義内容をインターネットにて広く公開するとともに、web講座として講義外に学生が学びを深めることができる教材作成に取り組む。                 |
| 2. COC地域人材育成プログラムの一環として鹿児島県種子島西之表市で演習を実施(鹿児島国際大学：演習Ⅲ・Ⅳ)                        | 2016年04月～2018年03月 | 鹿児島県種子島の西之表市を演習フィールドとして、ゼミ生を中心に離島地域における障害者の生活実態とフォーマル・インフォーマルサポートの現状を研究する。行政や地域住民、当事者との調整を学生メンバーが中心となって担当し、調査・フィードバックを行うことで社会調査の基礎知識や、調整業務、社会人としてのスキルの獲得に取り組む。 |
| 3. 他領域専門職のゲストスピーカー招聘(早稲田大学：「ソーシャルワーク演習Ⅲ・Ⅳ」)(鹿児島国際大学：「ソーシャルワーク演習Ⅲ」)             | 2014年04月～現在に至る    | 社会福祉士に求められる「多職種連携・チームアプローチ」について学びを深めるため、医師・看護師等をゲストスピーカーとして講義に招聘し、他領域から見た社会福祉士のイメージと、期待する業務内容について講義、ディスカッションを行う。   |
| 4. 学内情報ポータルを活用した講義外の学習支援   | 2013年04月～現在に至る    | 学内情報ポータルを用いて講義で使用した資料を受講生と共有するとともに、掲示板機能を用いて質問や疑問、講義内容の改善点等を教員と学生が自由に議論できる環境を設定。講義外の学習支援の充実に努める。   |
| 5. マルチメディアを活用した講義内容の構築   | 2013年04月～現在に至る    | 視覚教材を用いた面接技法の学習支援、ロールプレイ場面の録画と録画内容を用いた自己覚知支援、パワーポイントによる視覚効果を用いた学習支援に取り組む。  |

| 2 作成した教科書、教材  |                   |  |
|---|-------------------|--|
| 1. 『高齢者に対する支援と介護保険制度』   | 2018年04月30日       | (担当執筆箇所)<br>「第1章 高齢者の生活状況」<br>(掲載ページ) pp. 15-28.<br>高齢者が置かれている生活状況について、各種統計資料を参考に健康・医療・経済状況・就労・虐待件数等の多角的な視座から記載を行う。  |
| 2. 「地域包括・在宅介護支援センターによる地域づくり実践マニュアル」(全国社会福祉協議会、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会発行)   | 2016年07月25日       | これまで地域包括支援センターが取り組んできた事例を整理し、地域活動・地域づくりを展開していくための過程や方法を分析することで、マニュアル書を作成する。全国社会福祉協議会ならびに「全国地域包括・在宅介護支援センター協議会」所属のセンターへ送付し、職員研修の資料として活用される。<br>「2章 地域づくり実践のガイドライン」における「3. 地域課題に対する支援計画作成」「4. 地域活動実施」「5. 地域活動の評価」執筆担当。 |
| 3. 社会福祉士国家試験過去問題解説集『2018社会福祉士国家試験過去問題解説集』『2017社会福祉士国家試験過去問題解説集』   | 2016年05月10日～現在に至る | 社会福祉士国家試験として過去に出題された問題について解説を行う。近年の制度改正等、最新の動向を盛り込み、実際の国家試験問題をとおして学習を深めることができる教材作成に取り組む。解答に達するまでの考え方を示し、国家試験受験合格を目指す受験者が利用しやすい解説書となるように工夫を行った。(解説執筆)<br>(一般社団法人日本社会福祉士養成校協会編集：中央法規出版発行)                              |
| 4. 明るい長寿社会づくり推進機構職員全国研修会研修教材「地域貢献につながる高齢者の人材育成と活動支援」(一般財団法人長寿社会開発センター発行)  | 2013年12月12日～現在に至る | 全国社会福祉協議会や行政に配置されている「長寿社会づくり推進機構職員」を対象とする全国研修会の講師を担当する。地域包括ケアシステムにおけるマンパワーとして高齢者が地域貢献や福祉支援に関わる際に、どのように人材育成を行えばよいか、また実際に高齢者が支援活動を展開するうえで、どのようにその活動を支援していけばよいかということについて実践マニュアルを作成し、全国研修会の教材として使用される。                   |
| 5. 社会福祉士国家試験模擬問題集『社会福祉士国家試験模擬問題集2018』『社会福祉士国家試験模擬問題集2017』『社会福祉士国家試験模擬問題集2016』『社会福祉士国家試験模擬問題集2015』『社会福祉士国家試験模擬問題集2014』『社会福祉士国家試験模擬問題集2013』 | 2012年07月20日～現在に至る | 社会福祉士国家試験対策として模擬問題を作成。作成に関しては、各問に対する知識の習得はもとより、問の内容が、関連する制度政策、理論においてどのように位置付けられているのかということについても解説することにより、体系立てた学習が可能となるような模擬問題ならびに解説作成に取り組む。模擬問題の作成により得られた過去に出題された問題内容や出題傾向を応用し、学                                      |

| 教育上の能力に関する事項  |                         |  |
|---|-------------------------|--|
| 事項  | 年月日                     | 概要   |
| <b>2 作成した教科書、教材</b>   |                         |  |
|   |                         | 内での社会福祉士国家試験対策にも活用する。<br>(作問・解説執筆)<br>(一般社団法人日本社会福祉士養成校協会編集：中央法規出版発行)  |
| <b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>  |                         |  |
| 1. 全国障害者総合福祉センター全国管理運営研修会 基調講演  | 2017年09月29日             | 全国研修会において障害者総合福祉センター職員(管理・運営者)を対象に基調講演「障害のある人の権利擁護と意思決定支援」を行う。   |
| 2. かごしまねりん大学講師 (鹿児島県社会福祉協議会主催)  | 2016年11月11日～2017年07月05日 | 「地域づくり」の重要性について、自身のこれまでの研究結果等を踏まえて地域住民(高齢者)に対して講義を行う。重要性の理解だけでなく、実践力を高める視座から各地の事例を中心に方法論についても言及した講義・研修を実施した。   |
| 3. 認知症ケア専門士認定試験受験対策講座「社会資源領域」講師 (一般社団法人認知症ケア学会主催)   | 2016年05月28日～現在に至る       | 認知症ケア専門士認定試験科目の一つである「社会資源」領域の受験対策講座を担当する。認知症を取り巻くフォーマル・インフォーマルの社会資源について、その役割と活用方法、制度的背景について受験生に対して解説を行う。   |
| 4. 山梨県社会福祉協議会職員研修講師 (山梨県社会福祉協議会主催)  | 2015年02月21日             | 山梨県社会福祉協議会に所属するボランティア担当職員に対して、ボランティア(地域住民)との協働・連携の在り方について講義を行う。グループワークを取り入れ、実践力が向上することを視野に入れた内容で講演・研修を行う。  |
| 5. 「明るい長寿社会づくり推進機構職員全国研修会」講師 (一般財団法人長寿社会開発センター主催)   | 2013年12月12日～2014年12月10日 | 「長寿社会づくり推進機構職員」を対象とする全国研修会の講師を担当する。「地域貢献につながる高齢者の人材育成と活動支援」をテーマに、連続二日間の講義を実施する。ケーススタディやグループディスカッションを用いて実践的な学びを深めることができるように取り組む。  |
| 6. 被災者支援コーディネーター講座講師 (震災支援ネットワーク埼玉主催)   | 2013年07月19日～2014年03月09日 | 東日本大震災によって避難生活・生活再建を目指す避難者への適切な支援を展開していく実践力の獲得を目的に、医療、臨床心理、社会福祉の専門家による講座を実施する。種々の専門家、一般ボランティアが毎回50名近く受講。講座内では、「相談支援の基礎」および「災害弱者への対応：障害・高齢者への支援」を担当する。  |
| <b>4 その他</b>  |                         |  |
| 1. 高校における模擬講義 私立鹿児島高等学校 鹿児島県立川辺高等学校 鹿屋市立鹿屋女子高等学校 私立鹿児島高等学校 鹿児島県立霧島高等学校 鹿児島県立野田女子高等学校 私立早稲田本庄高等学校 私立星野高等学校 | 2013年10月01日～現在に至る       | 社会福祉という学問領域やその仕事に高校生が関心や興味を示し、将来の進路希望の選択肢として社会福祉領域を視野に入れてもらえるように、「福祉の仕事と可能性」「障害の理解」「相談援助の奥深さ」等といったタイトルでわかりやすい模擬講義実施に取り組む。  |
| 職務上の実績に関する事項  |                         |  |
| 事項  | 年月日                     | 概要   |
| <b>1 資格、免許</b>  |                         |  |
| 1. 社会福祉士演習担当教員講習会修了   | 2012年8月31日              | 登録番号：2012-147  |
| 2. 社会福祉士実習担当教員講習会修了   | 2012年8月31日              | 登録番号：2012-147  |
| 3. 重度訪問介護従業者養成研修修了  | 2006年3月21日              |  |
| 4. 社会福祉士取得  | 2005年5月26日              | 登録番号：69727   |
| <b>2 特許等</b>  |                         |  |
| <b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>  |                         |  |
| 1. 早稲田大学総合研究機構災害復興医療人類学研究所(招聘研究員)   | 2015年4月1日～現在に至る         | 東日本大震災をはじめとする災害に対して、学問領域を超えて復興策の提案を行っていくことを目的に、各種調査・研究や報告を行う。研究成果についてはプレスリリースを行い、これまでもマスメディアでその結果が取り上げられている。<br>埼玉新聞(2012年11月5日付)<br>日本農業新聞(2013年7月28日付)<br>福島民友(2013年7月28日付)<br>東京新聞(2017年3月13日付) |
| <b>4 その他</b>  |                         |  |
| 1. 鹿児島県薩摩川内市社会福祉協議会権利擁護センター運営委員   | 2017年6月1日～2018年3月31日    | 社会福祉協議会併設の権利擁護センターにおいて、成年後見制度の困難事例に対する検討会や、担当職員の研修会企画等を行う。(副委員長)   |
| 2. 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会「スクール(学校)ソーシャルワーク教育課程認定事業」スクールソーシャルワーク教育課程専門科目群担当教員講習会に係る評価ワーキンググループ委員               | 2016年9月1日～現在に至る         | 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟が実施するスクールソーシャルワーク教育課程専門科目群担当教員講習会における最終評価(受講学生提出課題の評価)を担当する。   |
| 3. 鹿児島県障害者介護給付費不服審査委員会委員(鹿児島県)  | 2016年4月1日～2018年3月31日    | 介護給付費等に関する障害者からの不服審査を実施する。   |
| 4. 埼玉県所沢市自治基本条例推進委員会委員(埼玉県所沢市)  | 2014年6月1日～2015年3月31日    | 自治基本条例の普及啓発と推進のための取り組みについて助言・指導を行う。  |

| 職務上の実績に関する事項                       |                      |                                  |
|------------------------------------|----------------------|----------------------------------|
| 事項                                 | 年月日                  | 概要                               |
| <b>4 その他</b>                       |                      |                                  |
| 5. 埼玉県所沢市社会福祉法人認可審査委員会委員（埼玉県所沢市）   | 2014年4月1日～2015年3月31日 | 社会福祉法人認可に係る審査を担当する。              |
| 6. 埼玉県所沢市福祉部所管指定管理者選定委員会委員（埼玉県所沢市） | 2013年4月1日2015年3月31日  | 所沢市が所有・管轄する施設の指定管理者選定に係る審査を実施する。 |

| 研究業績等に関する事項                                     |         |                    |                   |  |
|---|---------|--------------------|-------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称                                     | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月          | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要   |
| <b>1 著書</b>                                     |         |                    |                   |  |
| 1. 『フクシマの医療人類学』                                 | 共       | 2018年05月<br>(刊行予定) | 遠見書房              | (担当執筆箇所)<br>・第2部第3章「エスノグラフィー：被災者の生の声に寄り添う」<br>・第4部第6章「インタビュー：復興に向けた歩み」(掲載ページ) 現在校正中<br><br>2011年3月11日に発生した東日本大震災からの6年間の歩みを総括し、故郷を失いつつある人々が、苦悩を抱えつつも、新しいコミュニティでどのように生きているか、その戦術を描き出した。担当執筆箇所では、心理的問題の解決だけではなく、雇用問題・生活費問題・法的問題などの社会的問題を解決するための「社会的ケア」の必要性について言及を行った。共著者名：辻内琢也，増田和高   |
| 2. 高齢者に対する支援と介護保険制度                             | 共       | 2018年04月30日        | ミネルヴァ書房           | (担当執筆箇所)<br>「第1章 高齢者の生活状況」(掲載ページ) pp. 15-28.<br>高齢者が置かれている生活状況について、各種統計資料を参考に健康・医療・経済状況・就労・虐待件数等の多角的な視座から記載を行う。  |
| 3. 『在宅ケアとチームアプローチ』                              | 共       | 2015年07月15日        | 株式会社ワールドプランニング    | (担当執筆箇所)<br>「地域包括ケアの考え方とチームアプローチ」(掲載ページ) pp. 37-41.<br><br>在宅ケアにおける「地域包括ケア」の意味と、チームアプローチの重要性について言及した。チームアプローチについては、フォーマルケアおよびインフォーマルサポートがどのようにチームを形成していくべきか、その在り方に言及すると同時に、チーム形成に求められる取り組みを紹介することで、今後の地域包括ケアシステム構築に向けた実践に資する基礎資料となる情報を論述した。  |
| 4. 震災後に考える：東日本大震災と向き合う91の分析と提言                  |         | 2015年02月           | 早稲田大学出版           | (担当執筆箇所)<br>「原子力発電所事故による県外避難に伴う近隣関係の希薄化と支援」(掲載ページ) pp. 277-285.<br><br>東日本大震災発生後2年が経過した段階での原発避難者（埼玉県への避難者）の生活改善に対する示唆を得ることを目的に、アンケート調査を実施した。結果、多くの避難者が近隣関係の希薄化を経験しており、心理的に強度のストレスを抱えながら生活していることが明らかとなった。この結果を受けて「心理的ケア」のみならず、雇用の促進やコミュニティの再構築などの「社会的ケア」が重要であることを提言した。  |
| 5. 新たな社会福祉学の構築                                  |         | 2011年03月           | 中央法規出版            | 共著者：鎌田薫，辻内琢也，根ヶ山光一，小島隆矢，増田和高他<br>(担当執筆箇所)<br>「地域におけるネットワーキングのあり方：地域活動を媒介としたネットワーク構築実践に向けた提言」(掲載ページ) pp. 237-245.<br><br>地域社会において喫緊の課題である地域の再構築，機能強化という点について、ネットワーク構築という視座から専門職がいかに取り組んでいくべきかということに言及した。実際にネットワーク構築に携わっている地域包括支援センター職員へのヒアリング，事例分析を行い、「地域福祉活動」を媒介としてネットワーク構築していくことの有用性について提言を行った。<br><br>共著者名：白澤政和，岡田進一，増田和高他 |
| <b>2 学位論文</b>                                   |         |                    |                   |  |
| 1. 「ケアマネジメントにおけるケースアドボカシーに着目したサービス調整に関する研究」（博士学 | 単       | 2012年09月25日        | 大阪市立大学            | ケアマネジメント実践におけるケースアドボカシーに着目したサービス調整を構成する要素の体系的実践の重要性，ならびに「主体性を尊重した利用者理  |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称  | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称                                   | 概要  |
|--|---------|-----------|---|---|
| <b>2 学位論文</b>  |         |           |   |   |
| 位論文)   |         |           |   | 解」, 「サービス提供機関との連携」といった介護支援専門員の日常における取り組みの重要性を指摘し, ケースアドボカシーに着目したサービス調整の実践向上に資する提言を行なった。   |
| <b>3 学術論文</b>  |         |           |   |   |
| 1. 「介護支援専門員の捉える利用者の生活意欲とその関連要因」 (査読付)                                | 単       | 2017年07月  | 『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』第36巻第1号, 鹿児島国際大学福祉社会学部, pp. 53-63. | 介護支援専門員を対象に, ケアマネジメント介入による利用者の生活状態および生活意欲の変化を捉える目的で, 2010年-2011年の期間において1年毎に計2回の郵送調査をパネル調査として実施した。利用者の生活動作, 社会環境との関わりといった生活状態の変化と生活意欲の関連を見ることを目的とした二項ロジスティック回帰分析を行った結果, 「生活意欲」を低下させるリスク要因として, 「食事の状況」, 「社会参加の状況」および「経済的状況」が示された。   |
| 2. 「ネットワーク構築のための地域活動支援実践とその構造: 地域包括支援センターの実践に関する調査をもとに」 (査読付)        | 共       | 2017年05月  | 『日本の地域福祉』第30巻, 日本地域福祉学会, pp. 117-129.               | ネットワーク構築のための地域活動支援実践の構造を探索的に明らかにすることを目的として調査・分析を実施した。因子分析の結果, ネットワーク構築のための地域活動支援実践を構成する因子として, 「地域の情報収集」, 「地域課題の析出」, 「地域活動プランニング」, 「地域活動実施準備」, 「地域活動の運営とモニタリング」の5因子が明らかとなり, これら5因子が相互に関連しながら実践されていることが示された。  |
| 3. 「福島原子力発電所事故により自主避難する母親の家族関係及び個人レベルのソーシャル・キャピタルとメンタルヘルスとの関連」 (査読付) | 共       | 2017年02月  | 『社会医学研究』第34巻第1号, 日本社会医学学会, pp. 21-29.               | 共著者名: 増田和, 畑亮輔, 白澤政和<br>子どもを持ち東日本大震災に伴う自主的に避難を続ける20歳から49歳までの母親を対象に, 家族関係及びソーシャル・キャピタルとメンタルヘルスとの関連について明らかにすることを目的とした調査を実施した。結果, 母子のみで生活する母親は家族と同居する母親に比べ2.502倍抑うつが疑われる状態にあることが明らかになった。また, 近隣住民への信頼感が高い母親に比べ, 低い母親は5.434倍, 地域活動への参加頻度が高い母親に比べて, 低い母親は3.244倍抑うつが疑われる状態にあることが明らかになった。   |
| 4. 「福島原子力発電所事故により県外避難する高齢者の個人レベルのソーシャル・キャピタルとメンタルヘルスの関連」 (査読付)       | 共       | 2017年02月  | 『心身医学』第57巻第2号, 一般社団法人日本心身医学会, pp. 173-184.          | 共著者名: 岩垣徳大, 辻内琢也, 小牧久美子, 福田千加子, 持田隆平, 石川則子, 赤野大和, 桂川泰典, 増田和, 小島隆也, 根ヶ山光一, 熊野宏昭, 扇原淳<br>原発事故によって福島県から東京都・埼玉県に避難している高齢者の個人レベルソーシャルキャピタルとメンタルヘルスの関連を明らかにすることを目的に調査・研究を実施した。分析を行った結果, 近隣住民への信頼, あいさつを交わす近隣住民の人数といった構造的指標が低い群ほど高いストレス状態にあることが明らかとなった。したがって, 豊かなソーシャルキャピタルを醸成することによりメンタルヘルスを向上させる支援の必要性が客観的に示された。                                       |
| 5. 「東日本大震災に伴う原発事故による県外避難者のストレス反応に及ぼす社会的要因: 縦断的アンケート調査から」 (査読付)       | 共       | 2016年08月  | 『心身医学』第56巻第8号, 一般社団法人日本心身医学会, pp. 819-832.          | 共著者名: 岩垣徳大, 辻内琢也, 増田和, 小牧久見子, 福田千加子, 持田隆平, 石川則子, 赤野大和, 山口摩弥, 猪俣正, 根ヶ山光一, 小島隆也, 熊野宏昭, 扇原淳<br>東日本大震災の1年後と2年後に, 埼玉県ならびに東京都へ福島県から県外避難している避難者へアンケート調査を実施し, ストレス反応およびストレス反応への関連要因の分析を行った。分析の結果, 震災1年後では, ストレス反応に影響を及ぼす要因として, 生活費の心配, 失業や避難先での人間関係, 賠償の問題がストレス反応を高めていた。一方, 2年後では, 健康状態の悪化, 家族関係, 住環境などがストレス反応に影響を与えており, 時間的経過がストレスサーに変化を与えていることが明らかとなった。 |
| 6. 「福島県内仮設住宅居住者にみられる高い心的外傷後ストレス症状: 原子力発電所事故がもたらした身体・心理・社会的影響」 (査読付)  | 共       | 2016年07月  | 『心身医学』第56巻第7号, 一般社団法人日本心身医学会, pp. 723-735.          | 共著者名: 山口摩弥, 辻内琢也, 増田和, 岩垣徳大, 石川則子, 福田千加子, 平田修三, 猪俣正, 根ヶ山光一, 小島隆也, 扇原淳, 熊野宏昭<br>東日本大震災に伴って発生した福島原子力発電所事故の2年後に, 福島県内の仮設住宅において避難生活を送る住民の心的外傷後ストレス症状と, そのストレスに影響を与える要因を明らかにするための調査を実施した。解析を行ったところ, 62.6%の者がPTSDの疑いがある数値を示した。また, 関連要因を検討した結果, 「経済的困難」, 「賠償の心配」, 「持病の悪化」, 「新疾患の罹患」, 「相談者の不在」  |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称   | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称                            | 概要  |
|---|-------------|---------------|--|---|
| <b>3 学術論文</b>   |             |               |  |   |
| 7. High Prevalence of Post-Traumatic Stress Symptoms in Relation to Social Factors in Affected Population One Year after the Fukushima Nuclear Disaster (査読付) | 共           | 2016年03月      | PLOS Journals<br>(欧文電子ジャーナル)                     | <p>が有意な予測因子として認められた。</p> <p>共著者名：辻内琢也，小牧久見子，岩垣徳大，<u>増田和高</u>，山口摩弥，福田千加子，石川則子，持田隆平，小島隆也，根ヶ山光一，扇原淳，熊野宏昭</p> <p>2011年に発生した東日本大震災による精神的健康面への影響について調査を実施し，IES-Rの得点とPTSDのリスク要因について分析（ロジスティック回帰分析）を行った。その結果，調査対象となった者の59.4%がPTSDの疑いがある数値を示した。また，精神疾患の持病がある者，近隣住民との関係性に心配事がある者，震災により職を失った者，社会的つながりを喪失した者，生活費に心配がある者は，そうでない者に比して有意にIES-Rの得点が高く，PTSDの疑いがあるカットオフ値を超えていたことが明らかとなった。</p>                   |
| 8. 「原子力発電所事故による県外避難に伴う近隣関係の希薄化：埼玉県における原発避難者大規模アンケート調査をもとに」(査読付)   | 共           | 2013年08月      | 『厚生指標』第60巻第8号，厚生統計協会，pp. 9-16.                   | <p>共著者名：Takuya Tsujiuchi, Maya Yamaguchi, <u>Kazutaka Masuda</u>, Marisa Tsuchida, Tadashi Inomata, Hiroaki Kumano, Yasushi Kikuchi, Eugene F. Augusterfer, Richard F. Mollica</p> <p>東日本大震災によって避難を強いられられた者のうち，埼玉県へ県外避難を行った福島県民を対象に，精神的健康の現状および避難先地域社会における近隣関係の実態を把握することで，孤立化に対する支援の方向性を提言していくことを目的とした調査・分析を行った。結果，震災前に構築された地域コミュニティが避難によって崩壊し，現在は従前に比して希薄化した人間関係の下，避難者が生活している実態が明らかとなった。</p> |
| 9. 「原発避難者への官民協同支援体制の構築：埼玉県を事例に」(査読付)  | 共           | 2012年11月      | 『日本心療内科学会誌』第16巻第4号，日本心療内科学会，pp. 261-268.         | <p>共著者名：増田和高，辻内琢也，山口摩弥，山下奏，永友春華，南雲四季子，栗野早貴</p> <p>東日本大震災のように大規模県外避難者を出した場合は「県外避難」という特徴を考慮した支援が求められる。具体的には，住み慣れた地域を離れ，新しい地域で生活することで引き起こされる孤立化や社会的排除に対応できる「社会的ケア」が求められる。震災後社会的ケアに取り組んだ埼玉県の事例からは，社会的ケアを実現するためには，個人情報把握する「官」と実質的な支援を担う「民」の協働が不可欠であることが示された。今後は，官民協同による「社会的包摂 (social inclusion)」の考えに基づいた新たな支援体制の構築が求められる。</p>   |
| 10. 「原発事故避難者の心理・社会的健康：埼玉県における調査から」(査読付)   | 共           | 2012年10月      | 『Depression Frontier』第10巻第2号，医薬ジャーナル社，pp. 21-31. | <p>共著者名：辻内琢也，<u>増田和高</u>，千田瑛子，永友春華，伊藤康文，中上綾子，鈴木勝己，猪俣正</p> <p>東日本大震災発生後1年が経過した段階での原発避難者（埼玉県への避難者）の生活改善に対する示唆を得ることを目的に，アンケート調査を実施した。結果，多くの避難者が生活上の困りごとを抱えており，そうした生活上の困りごとが重層的に影響を与えることにより，避難者の心理・社会的健康が損なわれていることが明らかとなった。「心理的ケア」のみならず，雇用の促進やコミュニティの再構築などの「社会的ケア」が重要であることが示唆された。</p>   |
| 11. 「構造方程式モデリングによるケースアドボカシーに着目したサービス調整実践に影響を与える要因の検討」(査読付)  | 単           | 2012年09月      | 『在宅ケア学会誌』第16巻第1号，ワールドプランニング，pp. 36-43.           | <p>共著者名：辻内琢也，山口摩弥，<u>増田和高</u>，永友春華，南雲四季子，栗野早貴</p> <p>「ケースアドボカシーに着目したサービス調整」の実践モデル構築を目的に，構造方程式モデリングを用いたモデル検証を行なった。分析の結果，設定した実践モデルの信頼性と妥当性が実証的に証明された。また，「ケースアドボカシーに着目したサービス調整」に最も影響を与える要因として「主体性を尊重した利用者理解」が析出されたとともに，「サービス提供機関との連携活動」が両実践を下支えする鍵実践となることが明らかとなった。</p>   |
| 12. 「ケアマネジメントにおけるケースアドボカシーに着目したサービス調整と所属組織内・外における協働体制との関連」(査読付)   | 単           | 2012年04月      | 『介護福祉学』第19巻第1号，ワールドプランニング，pp. 5-15.              | <p>共著者名：辻内琢也，山口摩弥，<u>増田和高</u>，永友春華，南雲四季子，栗野早貴</p> <p>「ケースアドボカシーに着目したサービス調整」の実践向上に影響を与える要因を明らかにすることを目的に，「ケースアドボカシーに着目したサービス調整」と，所属組織内・外における協働体制との関連について量的調査を基に明らかにした。分析の結果，「サービス提供機関との連携活動」「上司・同僚からのサポート」が，ケースアドボカシーに着目したサービス調整実践を高める要因として析出され，職場内・外との協働体制構築の重要性が示唆された。</p>  |
| 13. 「ケアマネジメントにおけるケー   | 共           | 2010年10月      | 『介護福祉学』第17巻                                      | <p>先行研究における「アドボカシー実践を行うために</p>  |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称   | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称  | 概要  |
|---|---------|-----------|--|---|
| <b>3 学術論文</b>   |         |           |  |   |
| スアドボカシーに着目したサービス調整とその関連要因：主体性を尊重した利用者理解に焦点をあてて」（査読付）  |         |           | 第2号、ワールドプランニング、pp.124-135.   | はその対象となる者の主体性を理解しておくことが重要となる」という指摘を受け、介護支援専門員が実践する「ケースアドボカシーに着目したサービス調整」と、「主体性を尊重した利用者理解」の関連について量的調査をもとに明らかにした。分析の結果、主体性を尊重した利用者理解を前提に、ケースアドボカシーに着目したサービス調整を展開していくことの重要性が実証的に示され、先行研究を支持する結果を得た。  |
| 14. 「アドボカシーに着目したケアマネジメント実践のあり方に関する文献的考察」（査読付）   | 単       | 2010年01月  | 『生活科学研究誌』第9巻、大阪市立大学生活科学研究科、pp.63-71.   | 共著者名：増田和、岡田進一、白澤政和<br>ケアマネジメント実践におけるアドボカシー概念の援用可能性を検討することを目的に、アドボカシーに関する先行研究のレビューを行なった。理論的変遷からアドボカシーの特質およびケアマネジメントとの関連について整理した結果、アドボカシーに着目したケアマネジメントとして、「利用者とサービス提供者の力関係を是正（ケースアドボカシー）し、サービス調整を介して利用者の利益や権利を保障すること」の重要性が明らかとなった。            |
| 15. 「ケアマネジメントにおけるアドボカシーに着目したサービス調整実践の構成要素：ケースアドボカシーに焦点をあてて」（査読付）  |         | 2007年07月  | 『生活科学研究誌』第6巻、大阪市立大学生活科学研究科、pp.175-183.   | ソーシャルワーク領域において鍵概念として取り上げられている「ケースアドボカシー」の概念が、ケアマネジメント実践においてどのように具現化されているのかということについて量的調査をもとに明らかにした。結果として、ケースアドボカシーに着目したケアマネジメント実践は、「自己表明に向けた環境整備」、「苦情解決に向けた利用者との協働」、「サービスの適切性保障」、「利用者利益の保護的媒介」の4領域の実践で構成されていることが明らかとなった。                     |
| 16. 「新潟県中越大地震における要支援・介護高齢者に対する危機管理の実態と課題」（査読付）  | 共       | 2005年04月  | 『老年社会科学』第28巻第1号、ワールドプランニング、pp.65-73.   | 共著者名：増田和、岡田進一、白澤政和<br>災害弱者に対する危機管理のあり方を探ることを目的に、新潟県中越大地震発生時において要支援・介護高齢者に対する緊急時対応を行った介護支援専門員へ量的調査を実施した。調査結果より、介護支援専門員は自らが被災しているにも関わらず主体的に安否確認等を実施しており、災害弱者に対するセーフティネットとして機能していたことが明らかとなった。<br><br>共著者名：岡田直人、白澤政和、橋本力、朝野英子、鄭尚海、堂園裕美、増田和、三谷勇一 |
| <b>その他</b>  |         |           |  |   |
| <b>1. 学会ゲストスピーカー</b>  |         |           |  |   |
| 1. 第23回日本在宅ケア学会学術集会教育基調講演「ソーシャルサポートネットワークの現状と課題」講演者   | 単       | 2018年07月  | 第23回在宅ケア学会学術集会   | 個別支援における重要な要素出るソーシャルサポートネットワークの現状について現状を各種統計データを交えて分析するとともに、希薄化が指摘されているインフォーマルサポート部分について、個別支援一地域づくりの体系的なアプローチにより強化を図っていく方策について発表を行う。  |
| 2. 第18回日本在宅医学会大会・第21回在宅ケア学会学術集会合同大会セミナー「地域包括ケア実現に向けた専門職間の境界と連携」座長   |         | 2016年07月  | 第18回日本在宅医学会大会・第21回在宅ケア学会学術集会合同大会   | 地域包括ケアシステム実現に向けて求められる多職種連携ではあるが、それぞれの専門職領域の業務内容への理解不足が否めない。そこで、当該セミナーでは総合診療医の石川美緒氏、救急救命看護師の酒井周平氏、社会福祉士の畑亮輔氏を招聘し、それぞれの専門領域から見た他職種に求める連携内容と、連携を進めるうえでの今後の展望について講演してもらい、座長として地域包括ケアシステム構築に向けた提言をとりまとめた。  |
| <b>2. 学会発表</b>  |         |           |  |   |
| 1. 利用者の主体性が家族に阻害される状況へのアドボカシー支援：介護支援専門員に対するヒアリング調査をもとに  | 単       | 2016年06月  | 2016年度日本老年社会科学会第58回大会（松山）  | 利用者の主体性が家族によって阻害されるような場面において介護支援専門員が利用者本人の利益を守るためにどのようにアドボカシー支援を実践しているのかを明らかにし、実践モデルを提示していくことを研究目的とした調査結果を報告。実践の根幹としての「ターゲットシステムとの関係性構築」「利用者本人の意向の聞き取り」および「家族の意向の聞き取り」を前提とした「本人意向の家族への代弁」、「家族意向の本人への代弁」を行っていくという実践モデルを提案した。                 |
| 2. Post-Traumatic Stress Disorder symptom affected by severe social factors in elderly evacuees of Fukushima Nuclear Disaster | 単       | 2015年10月  | The 10th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional | 東日本大震災によって避難を強いられた者のうち県外避難を行なった高齢者を対象に、現在の精神的健康状態の把握とその状態に影響を与えている関連要因の析出を行った結果を報告した。また、経済状況や精神疾患の既往歴に加え、近隣住民などのソーシャルキャピタルの欠如が大きく関連していたことを報告した。   |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称   | 単著・<br>共著書別 | 発行又は<br>発表の年月 | 発行所、発表雑誌等<br>又は学会等の名称   | 概要  |
|---|-------------|---------------|---|---|
| <b>2. 学会発表</b>  |             |               |   |   |
| 3. 県外避難高齢者の精神的健康に影響を与える要因：東日本大震災発災2年後の県外避難者調査をもとに   |             | 2015年09月      | Congress (Chiang Mai, Thailand)<br>日本社会福祉学会第63回秋季大会 (久留米)                                 | 東日本大震災によって避難を強いられた者のうち県外避難を行なった高齢者を対象に、現在の精神的健康状態の報告に加え、地震・津波による被害体験や、県外避難に伴う要因が高齢者の精神的健康状態に及ぼす影響について報告を行った。  |
| 4. Factors Associated with the Confidence of Frail Elderly Patients to Live at Home                                     | 共           | 2014年06月      | Gerontological Society of America 2014 Annual Scientific Meeting (Washington, DC)         | 日本における介護保険制度を利用する高齢者の状況変化を明らかにすることを目的に、2年間にわたる縦断調査を実施した。高齢者本人もしくはその家族の在宅生活継続の自信に影響する要因を明らかにするために、自信を従属変数とする2項ロジスティック回帰分析を実施した結果、高齢者の食事に関する能力、家族の介護負担、そして介護支援専門員の経験が有意に高齢者の在宅生活継続に向けた自信に関連していることが明らかとなった。<br>Masakazu SHIRASAWA, Kazutaka MASUDA, Ryosuke HATA, Satoru YOSHIE, Koji KISHIDA, Katsuko TANNO, Keiko YAMADA, Hiroko SHIRAKI   |
| 5. Research on Relationships between the Nursing-Care Services and the User's Situation during One-Year Case Management | 共           | 2013年11月      | Gerontological Society of America 2013 Annual Scientific Meeting (New Orleans, Louisiana) | 要介護高齢者の状態変化と介護サービスの利用との関係性を明らかにすることを目的としてパネル調査を実施した。高齢者の状態変化と介護サービス利用との関係性を検討するため、ロジスティック回帰分析を実施した結果、デイサービスの利用が食事に関する状態低下を、また、ホームヘルプサービスの利用が家事の状態低下を有意に低減していることが明らかとなった。他にもサービスの利用が状態の低下を抑制していることが示された。この結果から、ケアマネジャーには高齢者の状態を継続的なアセスメントによって把握し、適切なサービス利用を調整することが求められていることが示唆された。<br>Kazutaka MASUDA, Masakazu SHIRASAWA, Ryosuke HATA  |
| 6. 介護支援専門員の捉える利用者の在宅生活に対する自信とその関連要因   | 共           | 2013年06月      | 日本ケアマネジメント学会第12回研究大会(大阪)  | 2010年ー2012年の期間において1年ごとに計3回のパネル調査を郵送にて実施し、介護支援専門員が捉える利用者の在宅生活に対する自信と利用者のQOLの状態がどのように関連しているのかを明らかにした。調査及び分析の結果、ケアマネジメント利用開始初期における在宅生活の自身を悪化させるリスク要因として、「意思疎通」および「食事」の状態悪化が析出された。一方で、ケアマネジメント開始から1年が経過した時点においては、「生活全般の自立度」および「家族介護者負担」の状態悪化がリスク要因として示された。<br>増田和尙, 畑亮輔, 吉江悟, 白澤政和, 丹野克子, 白木裕子, 山田圭子, 高砂裕子, 米澤麻子  |
| 7. User attributes that influence the Degradation of QOL of the elderly long-term care insurance users                  | 共           | 2013年06月      | The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (Seoul)                        | 本研究は、QOLが低下しやすい利用者の特性を明らかにすることを目的に、介護支援専門員が捉えた1年間における利用者のQOL変化と、利用者属性の関連を検証した。その結果、QOLを低下させる要因として年齢や、認知症、脳血管性障害後の後遺症が析出された。QOLが低下するリスクの高い利用者に対しては、密なアセスメントを行い、できるだけ状態が低下しないように適宜サービスを調整していく必要があることが示された。<br>Kazutaka MASUDA, Masakazu SHIRASAWA, Satoru YOSHIE, Ryosuke HATA, Hiroko SHIRAKI, Keiko YAMADA, Hiroko TAKASUNA, Asako YONEZAWA, Koji KISHIDA, Yoshimasa TAKASE and Katsuko TANNO |
| 8. Care manager is referred to as a key professional of elderly persons care in Japan                                   | 共           | 2009年11月      | The Gerontological Society of America 62nd Annual Scientific Meeting (Atlanta, Georgia)   | 居宅介護支援事業の取り組みが、経営主体によってどのように異なってくるのかを明らかにし、ケアマネジメントサービスの質の均一化を図るための示唆を得ることを目的に調査を実施した。A市内の居宅介護支援事業所953か所の管理者を対象にアンケート調査を実施し、管理者の捉える事業所の取り組みについて因子分析した結果、「働きやすい職場環境づくり」、「業務向上に向けた取り組み」、「待遇の充実」の3因子が抽出された。また、分析の結果から、経営主体の大半を占める株式会社は、運営する事業所の業務向上に向けた取り組みや、職員の待遇の向上に目を向ける必要があることが明らかとなった。<br>Kazutaka MASUDA, Ryosuke HATA, Masakazu SHIRASAWA   |
| <b>3. 総説</b>  |             |               |   |   |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称                           | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称                     | 概要   |
|---------------------------------------|---------|-----------|---------------------------------------|--|
| <b>3. 総説</b>                          |         |           |                                       |  |
| 1. 田畑洋一編著『琉球弧の島嶼集落における保健福祉と地域再生』書評    | 単       | 2017年11月  | 『自治研かごしま』, 第117巻, 鹿児島地方自治研究所, p. 51.  | 本書の概要を解説したうえで、島嶼エリアでの福祉実践は「特殊なエリア」での実践例ではなく、全国の地域福祉が抱える共通項を有しており、島嶼という物理的環境が故に向き合わざるを得なかった島嶼エリアの福祉実践はまさに先進事例としてわが国の地域福祉に援用可能であることを示唆した。<br><br>各章の要約を行い解説すると同時に、介護人材の定着に向けて充実させるべきとされていた「社会的評価」について、具体的な方策として著者がどのような案を持っているのかについて補足的説明を求めた。 |
| 2. 大和三重著『介護人材の定着促進に向けて：職務満足度の影響を探る』書評 | 単       | 2014年12月  | 『人間福祉学研究』第7巻第1号, 関西学院大学, pp. 143-145. |  |

**4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績**

**5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等**

|              |   |             |     |   |
|--------------|---|-------------|-----|---|
| 1. APA心理学大辞典 | 共 | 2013年09月06日 | 培風館 | アメリカ心理学会 (APA, American Psychological Association) が編纂した用語辞典を日本で発刊するにあたり、福祉領域に関係する単語の翻訳を担当する。<br>G. R. ファンデンボス監修<br>繁栞算男・四本裕子監訳 |
|--------------|---|-------------|-----|---|

**6. 研究費の取得状況**

|   |   |               |               |   |
|---|---|---------------|---------------|---|
| 1. 科学研究費助成事業 「基盤研究(B)」 琉球弧型互助形成にみる島嶼防災と地域再生実践モデルの開発評価に関する研究 | 共 | 2014年04月(3年間) | 独立行政法人日本学術振興会 | 島嶼地域における互助やユイの精神が地域再生にもたらす可能性と、都市部への援用可能性について研究を行い、地域再生実践モデルの開発を目指す。(配分総額：13,000,000円)  |
| 2. 科学研究費助成事業 「若手研究(B)」 利用者の主体性が家族によって阻害される状況へのアドボカシー支援      | 単 | 2012年04月(2年間) | 独立行政法人日本学術振興会 | 「アドボカシー支援が求められる背景」, 「アドボカシー支援の構造」, 「アドボカシー支援に影響を与える要因」を体系的に明らかにしていくことによって、利用者と家族との関係性におけるアドボカシー支援に関する仮説モデルを帰納的に構築し、実証的に検証を行うことで、介護支援専門員によるアドボカシー支援の評価・介入指針となる「実践モデル」の提示を目指す。(配分総額：1,950,000円) |

学会及び社会における活動等

| 年月日                         | 事項   |
|-----------------------------|--|
| 1. 2017年06月01日～2018年03月31日  | 薩摩川内市 社会福祉協議会 権利擁護センター運営委員 (副委員長)  |
| 2. 2016年09月01日～現在に至る        | 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会「スクール(学校)ソーシャルワーク教育課程認定事業」スクールソーシャルワーク教育課程専門科目群担当教員講習会に係る評価ワーキンググループ委員 |
| 3. 2016年04月01日～2018年03月31日  | 鹿児島県障害者介護給付費等不服審査委員会委員   |
| 4. 2016年04月01日～現在に至る        | 日本在宅ケア学会 学会誌査読委員   |
| 5. 2015年04月1日～現在に至る         | 日本老年社会科学会 学会誌査読委員  |
| 6. 2015年04月01日～現在に至る        | 日本ケアマネジメント学会 学会誌査読委員   |
| 7. 2014年06月01日～2015年03月31日  | 埼玉県所沢市自治基本条例推進委員会委員  |
| 8. 2014年04月01日～2015年03月31日  | 埼玉県所沢市社会福祉法人認可審査委員会委員  |
| 9. 2014年04月01日～現在に至る        | 日本認知症ケア学会 認知症上級ケア専門士認定試験委員   |
| 10. 2013年04月01日～2015年03月31日 | 埼玉県所沢市福祉部所管指定管理者選定委員会委員  |
| 11. 2012年04月01日～現在に至る       | 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 国家試験合格支援委員会 委員  |